

Title	京大東アジアセンターニュースレター 第339号
Author(s)	
Citation	京大東アジアセンターニュースレター (2010), 339
Issue Date	2010-10-18
URL	http://hdl.handle.net/2433/128833
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

(旧・「京大上海センターニュースレター」)

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

2010 年 10 月 18 日

目次

- 「中国経済研究会」のお知らせ
- 中国自動車シンポジウム: 中国自動車市場のボリュームゾーンを探る
- 韓国慶北大学校経商大学長鄭慶秀教授講演会のご案内
- 東アジア 駆け足レポート 《 沸き立つ東アジア 》
- 琿春朝日村開拓団の最後の合同慰霊祭
- 【中国経済最新統計】(試行版)

「中国経済研究会」のお知らせ

10 月の中国経済研究会(13 回目)は中国経済学会学術研究会(西日本部会)と共同で下記の内容で開催することになりました。ご関心のある方はぜひご参加ください。なお、今回の研究会の時間と場所は従来と異なるので、十分ご注意ください。

2010 年・中国経済学会学術研究会(西日本部会)
京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター中国経済研究会
共同研究会プログラム(仮)

日時: 2010 年 10 月 23 日(土) 13:30~17:50
場所: 京都大学 吉田キャンパス 法経東館 3 階 311 演習室

■経済発展セッション

時 間: 13:30-14:20

報告者: 李小春(愛知大学中国研究科博士課程)

テーマ: 「中国僻地における貧困問題研究—陝西省白水県を事例として」

時 間: 14:20-15:10

報告者: 牧野文夫(法政大学経済学部)・羅歆鎮(東京経済大学経済学部)

テーマ: 「経済格差、社会階層と教育格差: 中国浙江省・貴州省の事例(仮題)」

時 間: 15:10-16:00

報告者: 劉徳強(京都大学経済学研究科)

テーマ: 「中国経済はルイス転換点を越えたのか？」

————— コーヒー・ブレイク: 16:00-16:10 —————

■企業金融セッション

時 間: 16:10-17:00

報告者: 唐成(桃山学院大学経済学部)

テーマ: 中国の中小企業金融—マイクロデータによる分析—

時 間： 17:00-17:50
報告者： 胡海青（西安理工大学）・白石麻保（北九州市立大学）・矢野剛（京都大学経済学研究科）
テーマ： Ownership Effects for the Efficiency of Financial Intermediation through
Trade Credit in China

（＊研究会終了後、有志による懇親会がありますので、ご自由に参加下さい）

第 14 回 中国経済研究会予告

時 間： 2010 年 11 月 9 日(火) 16:30-18:00
場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 3 階第 3 教室
報告者： 李曉（吉林大学経済学院教授・中国世界経済学会副会長）
テーマ： 「人民元国際化の最新戦略及び動向」（仮題）

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第 3 火曜日に行います。2010 年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期： 4 月 20 日（火）、5 月 18 日（火）、6 月 15 日（火）、7 月 6 日（火）、7 月 20 日（火）

後期： 10 月 23 日（土）、11 月 9 日（火）、12 月 21 日（火）、1 月 18 日（火）

主催 京都大学東アジア経済研究センター

共催
東京大学ものづくり経営研究センター
東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点
京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援
京都大学東アジア経済研究センター協力会

中国自動車シンポジウム 中国自動車市場のボリュームゾーンを探る ——小型車・低価格車セグメントにおける代替・競争構造——

2010 年 11 月 6 日(土) 13 時
京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

総司会 京都大学大学院経済学研究科教授 梶山 泰生

13:00-13:10

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 田中秀夫

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅純二郎

13:10-13:50

京都大学大学院経済学研究科 教授 塩地 洋

新興国における小型車・低価格車セグメントの構造
——全体テーマと報告構成——

第 1 部 非自動車セグメントのボリューム

13:50-14:20

エイムス ディレクター

菊地 捷

低速電気自動車の車体構造と普及の見通し

14:20-14:50

東京大学社会科学研究所 教授

田島 俊雄

「汽車下郷」と中国的農用車・微型車の命運
—日本の「軽自動車」の再検討—

14:50-15:20

第2部 日中韓自動車メーカーのマーケティング戦略

15:30-16:00

明治大学国際日本学部 准教授

呉 在烜

現代自動車の現地適応戦略
—エラントラが売れる理由—

16:00-16:30

東京大学ものづくりセンター 助教

李 澤建

奇瑞汽車のマーケティング戦略

16:30-17:00

日産自動車中国事業部 部長

西林 隆

日産自動車の中国事業戦略

17:00-17:05

閉会

17:20-19:30

懇親会（参加費無料） 於カンフォーラ

司会 京都大学東アジア経済研究センター協定会 理事 宇野輝

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター長 劉徳強

閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協定会 副会長 大森経徳

参加資格： 自由参加、シンポジウム・懇親会とも入場無料

申込方法： 事前に御所属と御氏名を shioji@econ.kyoto-u.ac.jp（塩地）までご連絡ください。

問い合わせ先： 075-753-3428（塩地）

京都大学経済学研究科/経済学部、韓国慶北大学校経商大学学生交換協定締結記念**韓国慶北大学校経商大学長鄭慶秀教授講演会のご案内**

京都大学経済学部/経済学研究科では、日中韓の単位取得を含む学生交流を促進するという方針のもと、中国とは中国人民大学経済学院と、韓国とは慶北大学校経商大学との交渉を進めてきました。そして、中国人民大学とはさる10月15日に中国人民大学で協定の署名式を行ない、今度は京都大学において韓国慶北大学校との署名式を行なうこととなりました。そのため韓国慶北大学校経商大学の大学長(学部長)がわざわざ来られますので、併せ講演会をしていただくこととなりました。経営管理大学院の原先生のコメントもいただけますので、是非多数ご参加ください。よろしくお願いします。

日時 2010年11月25日(木) 15:00-17:00

会場 法経済学部本館2F第6教室

講演テーマ “知識管理システムのパフォーマンスの実際”

コメンテーター 原良憲経営管理大学院教授

(講演・コメントには通訳がはいります。)

主催 京都大学経済学研究科、京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

東アジア 駆け足レポート 《 沸き立つ東アジア 》

13. OCT. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

ヤンゴン・バンコク・ダッカ・ジャカルタ・コロンボ

9月26日から10月9日まで、東アジアの諸都市(ヤンゴン・バンコク・ダッカ・ジャカルタ・コロンボ)を、経済面での調査と、暴動や内乱の結末を見届けるのを目的として、駆け足で回ってみた。今回のレポートは、私の浅薄な知識や人脈に基づく調査であるため、誤認や的外れの点が多いと思っている。またこのようなフィールドワークやレポートには、「学問的な価値はない」と指弾されるのもよくわかっている。したがって私は、それぞれの国について仮説を立てて考えておき、この仮説を検証するため、今後、東アジア諸都市の定期的駆け足調査を行い続けたいと思っている。また今回、それぞれの国で、日本人同業者とのつながりをつくることができた。この関係を活かして、近日中に「東アジア縫製業連絡協議会」を立ち上げようと思っている。またこれを核にすれば、華僑・印僑を含めた国際版協議会を組織するのも夢ではないと思っている。 ※なおコロンボやダッカは東アジアの地域には入らないと思うが、経済圏としては組み入れて考えた方がよいと思うので、あえてこの表題にした。



1. ヤンゴン

長年にわたってミャンマーを牛耳ってきたタン・シュエ議長は、現在、73歳の高齢である。政府側も人民もそして隣国の中国も、タン・シュエ後を視野に入れ、動き出そうとしている。そして中国から逃げ出した仕事があふれかえっている。

①ミャンマー概況

- ・人口:約5000万人 ・首都ネピドー 最大都市ヤンゴン ・言語:ビルマ語。
- ・多民族国家:ビルマ族68%、シャン族9%、カレン族7%など。北部では、コーカン族などが武装闘争展開中。
- ・宗教:上座部仏教80%、キリスト教4%、イスラム教4%など。
- ・1948年に英連邦から独立。
- ・1990年の総選挙で、アウンサン・スーチー女史が率いる国民民主連盟が圧勝したが、軍部はそれを無視、軍政続行。2006年、首都をヤンゴンからネピドーへ移す。2007年9月、ヤンゴンで暴動勃発。軍部は2010年11月に総選挙を20年ぶりに実施すると発表。
- ・1\$ = 900チャット(ただし闇レート。市場では実質的にこのレートが通用。公定レートは1\$ = 6チャット)
チャット高の傾向。 昨年は1\$ = 1200チャットぐらいまで安くなった模様。
ワーカーの平均給与:月額40,000チャット=約4000円。

②ヤンゴンと私

私は1997年にヤンゴンで縫製工場を開始したが、予期せぬ東南アジア通貨危機に遭遇して、工場経営に行き詰まり、せっかく600人規模にまで拡大したその工場を泣く泣く手放した。私が工場から立ち去るとき、手塩にかけて育てたミャンマー人幹部たちが、「もう一度、ヤンゴンで工場を作ってください。私たちは待っています」と声をかけてくれた。また数か月後、通訳をしてくれていた若いミャンマー人男性が、「どうしても小島さんの下で働きたい」と、手紙がってきた。そこで私は彼を中国の工場に、ミャンマー再挑戦というときの準備のために、工場管理全般を勉強させることにした。彼はまじめに5年間ほど勉強を続けた。3年ほど前、彼と私はヤンゴンでひとまず、CADでのパターン作成の仕事をするために小さな会社を立ち上げた。その後、その会社は一進一退を繰り返していたが、彼はその仕事のかたわら衣料品のミャンマー国内販売を手がけたいと言い出した。それほどリスクがある商売ではないので、私はそれを承諾した。今ではそれが10店舗ほどに拡大している。

私はヤンゴンでの仕事の合間に、戦前の援蒋ルートを辿って、中国との国境沿いまで車で走ったことがある。そのとき途中で、日本軍の兵士がインパール作戦時に作った小さな湯治場を発見した。おそらくその周辺には多くの兵士が眠っているのだらうと思い、私はその場で合掌し、彼らの冥福を祈った。

③ホテルで取引先に遭遇

ヤンゴンに着いて、荷物を置くためにまずホテルに向かった。私はホテルのロビーに入って、驚いた。なぜならロビーの片隅で取引先の繊維商社の顔なじみの部長さん以下、その会社の数名の生産担当社員が、数台のパソコンを取り囲み、ロビーのソファを占領して、真剣な顔で会議をしていたからである。私は今まで、そのホテルではほとんど日本人にあったことがなかったので、そのことにまず驚き、次いで彼らが顔見知りの取引先であることにたまげ、なおかつ彼らがロビーを占拠していることに呆れたのである。部長さんにあいさつをしながら、その会議の様子をそれとなくかがうと、どうもヤンゴンの工場へ投入した仕事の納期が大幅に遅れていて、それを追及するためにヤンゴンへ部員総出動という態勢となり、ホテルの部屋の中ではネットがつかないというので、もっともつながりやすいロビーでの会議という羽目に陥っているようだった。

その後、ヤンゴンの同業者に会って情報を収集したところ、このところヤンゴン近辺の縫製工場に中国の工場でキャンセルされた仕事が殺到しており、それぞれキャパオーバーで大幅納期遅れが発生しており、それを督促・追及するために多くのアパレル会社の担当者がヤンゴンに来て、工場に張り付いているようだという。

④開国の兆しか？

ミャンマーでは11/07に総選挙が行われることになっており、テレビや新聞などでは政見放送や投票場所、方法などの説明が流されていたが、街頭には総選挙を通知するような看板や広告はまったく見当たらなかった。ただし政府は北部の少数民族との紛争地域では総選挙を実施しないと発表している。この総選挙は2007年の暴動の再発を怖れた政府の妥協の産物とも言われている。長らく軍政を続けてきたタン・シュエ議長も73歳の高齢となり、軍政内部でもタン・シュエ後への思惑が飛び交い、そこに民主化への外圧も加わり、ミャンマー情勢は大きく変わろうとしている。

総選挙をひかえて、政府は幾多の経済活性化政策を実施し、同時に人民への懐柔策を打ち出している。たとえばトラックやバスの輸入自由化を行い、同時に今までに密輸された乗用車で、ナンバーが取得できないため、地方でのみ乗り回されていた車に、登録を許可しナンバーを付与した。またガソリンスタンドの民営化、発電所の民間払い下げ、港湾業務への民間参入許可、銀行業務の民間開放、学校経営の民間開放などを次々に実施している。

これらの規制緩和と政策の実施とともに、ヤンゴンでは、長い間建設途中で止まっていたビルの建築などが開始され始めており、ヤンゴン市内の主要幹線では、電線や光ファイバーの地中埋設工事も行われていた。また元国营通信社跡地には、アジア最大のショッピング・モールが建設予定であるという。街中の女性たちもファッショナブルになっており、ジーパンやスカート、ワンピース姿なども多くなり、民族衣装のロンジーを駆逐しそうな勢いである。

⑤タイ暴動の意外な余波

今年5月のタイでの暴動後、タイとの国境貿易が不調となり、ヤンゴン市内ではタイ製品が少なくなって、中国製品が多くなってきているという。巷では、11/07の総選挙をひかえて、北部少数民族地域で紛争が勃発した場合、中国との国境貿易も途絶え、中国製品も市場から消えることを怖れている。政府もコーカン族との交戦を予測し、中国政府と国境付近の調整を話し合うために、タン・シュエ議長が9/07、急遽、北京へ飛んだ。昨年8月には、ミャンマー北部のシャン州コーカン地区で、政府軍とコーカン族が交戦し、巻き添えになるのを怖れたミャンマー人3万7千人ほどが、中国の雲南省臨滄市鎮康県南傘鎮に逃げ込んだ（詳しくは、昨年11月の私の現地レポート「その後のミャンマー難民」を参照）。政府もヤンゴン市民も、このような事態が再発することを怖れているのである。

⑥ひたひたと押し寄せる中国の影響

中国は待ってましたとばかり、タン・シュエ議長を歓待し、その意向を快諾したという。また同時にヤンゴン・ネピドー間の高速鉄道建設を請け負ったという。その工事は、ネピドー側ではすでに始まっており、2012年には開通する計画。これで、現在車で9時間かかっているヤンゴン・ネピドー間が3時間になる。政府は2013年に、ネピドーでアジア運動大会を開催する模様。私は、次回のヤンゴン入りのときに、ネピドーまで行って、この工事の進展具合を確かめるつもりである。なお最近、中国はヤンゴンの人民広場を買い占めた。この場所は、ミャンマーの誇る文化遺産シュエダゴン・パゴダと旧国会の真ん中に位置しており、中国の天安門広場のような地点である。



《中国に買い占められた人民広場》

⑦その他

- ・ミャンマー政府は北朝鮮からの武器を輸入しているという。
- ・数年前、軍政権内部の権力争いで失脚した当時のナンバー2のキン・ニュン氏は、自宅軟禁中。
- ・2007年の暴動のとき、日本人ジャーナリストの長井さんが射殺された場所は、現在、元通り屋台などが立ち並ぶ繁華街となっている。当時、公式には600人が殺されたという報道であったが、実際には2000人余。いまだに800人余が拘束、釈放されていない。

2. バンコク

タイ政局に大きな影響力を持っていたプミポン国王は83歳の高齢で、現在入院中ということもあり、赤シャツも黄シャツもプミポン後を考え画策している。もちろんここにも中国の影がちらついている。バンコクは東アジア交通の要であり、今後はその面で大きな役割を果たすのであろう。

①タイ概況

- ・人口:6300万人。
- ・宗教:上座部仏教95%。イスラム教4%。
- ・タイ全国に7000社にも及ぶ日系企業が進出している。自動車関連産業の進出が多い。
- ・すでにタイでは若者は3K の仕事を嫌い、労働集約型産業では人手不足現象が取り沙汰されるようになってきている。
- ・1\$ = 約30バーツ。ワーカーの平均月額給与:約23000円。

②バンコクと私

21年前、私はタイのバンコクで、サイアム・カジュアルという現地縫製会社の技術指導兼検品を行っていた。この会社は3000人ほどの縫製工場で、ヨーロッパ向けの仕事が主体であった。その工場が日本の繊維商社と組んで、日本向け輸出に取り組むことになり、私がそこに技術指導に入ったのである。その会社は華僑系で、同族経営に徹しており、長男は本社を守り、次男はイギリスの大学を卒業したあと、ヨーロッパ向け営業を担当し、三男は横浜国立大を卒業し、日本向け営業を担当するという仕組みを作っていた。三男はその名をブンチャイさんといい、優秀でとても優しい人であり、その後も親しく付き合っていた。ところが彼は5年ほど前に工場内の感電事故で亡くなってしまった。これで私のバンコクでの人脈は切れてしまった。

今回のバンコク調査にあたっては、バンコクでコンサルタント会社を経営中の F 氏(法政大学の増田辰弘教授の紹介)から、現地でいろいろ教えていただいた。

③タクシン(赤シャツ)対アピシット(黄シャツ)

国王と僧侶が治める穏やかな国だったタイが、今やテロの恐怖におののき、非常事態宣言を再延長しなければならない状態になっている。バンコクでは今年の5月、治安部隊の強行突入により、赤シャツ(反独裁民主同盟)のデモ隊が排除され、多くの犠牲者が出た。その後、バンコクでも大型ショッピングセンターや国営テレビ局で爆発があった。また地方でも爆弾騒ぎが続いている。

今回の赤シャツの一連の運動は、単なる偶発的なものではなく、冷静に計算され潤沢な資金を背景にしたものと考えられる。また赤シャツは黄シャツの支援を表明しているバンコク銀行を標的にし、破壊・略奪を行っている。



《赤シャツに破壊されたビル》

一方、08年12月の発足以来、アピシット政権は一貫して中国との友好関係を打ち出している。中国も09年6月、アピシット首相の北京入りを歓迎し、協議の結果、タイの高速鉄道の建設、原子力発電の技術協力、大型車両製造などで合意している。

④タイを貫く東西南北の「経済回廊」

それでもバンコクの街中では、そのような臭さをあまり感じさせない。タイは東アジアの交通の要としての姿を現しつつあるからである。タイを中心とするメコン地域において現在、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアを結ぶ何本ものハイウェイの建設工事が進んでいる。アジア開発銀行の融資や日本の ODA によって工事が進む、いわゆる「経済回廊」である。ひとつは、北は北京から昆明経由でラオスを経てタイに入り、バンコク経由外周道路を通り、マレーシアのクアラルンプールそして南はシンガポールへと続く「南北経済回廊」。もう一つは、ベトナムのダナンからタイ内陸部を横断し、ミャンマーのモラミヤインに続く「東西経済回廊」。すでにこの回廊の実現を見越して、ミャンマーのダチャイに、タイ資本の手で巨大な工業団地が造成され始めている。この団地に至る道路は、映画「戦場に架ける橋」で有名なクワイ河を通過するという。次回、ぜひ行ってみたいと思っている。

3. ダッカ

ダッカには依然として華僑の影は薄い。もちろん中国の影もない。ただしここにも中国からあふれ出した仕事が殺到している。日系企業もユニクロをはじめとして、拠点作りを急いでいる。その足下を見透かしたように、今年7月には労働者の激しいストとデモが起き、最低賃金が大幅に引き上げられた。

①バングラデシュ概況

- ・人口:約1億5200万人。面積の小さい国を除くと、世界でもっとも人口密度の高い国。
- ・1971年にバングラデシュ独立。その後クーデターで政権が転覆するなどしたが、1990年以降は安定。
- ・宗教:イスラム教83%、ヒンドゥー教16%。
- ・1\$ = 70タカ。タカ安傾向。ワーカーの平均賃金:月額4000~5000タカ=5000円~6000円。

②ダッカと私

17年前、私は当時16歳の次男を、ダッカに一人で放り出した。そのときホームステイをさせていただいたのが、モ

ンターズ・ブイアン氏宅である。私の目的は、暖衣飽食な日本社会にどっぷりつかり、自堕落な生活を続ける次男に、世界最貧国での生活を体験させ、目を覚まさせることであった。残念ながら、ダッカに行っても次男はあまり変化を見せず、その目的は達成できないまま1年間が終わろうとしていた。日本に帰国する予定の月に入って、次男は運良く腸チフスにかかった。異国の地で、さぞかし心細かったと思うが、私たち夫婦は一切、助けの手を差し出さなかった。もしダッカの地で命が果てるならば、それもその子の運命と腹を決めていた。また、そのような逆境から這い上がって来てこそ、その子に生きる力がついてくるのだと考えていた。私たちは長男も長女もそのような逆境を体験させてきたので、次男だけを例外扱いにする気はなかった。それでも腸チフスは日本では法定伝染病なので、病名を聞いたとき、若干動揺した。しかしブイアン氏が、「ダッカではそんなに騒ぐほどの病気ではない」というので、次男の命を彼らに託した。次男は1か月ほど入院していたようだが、その後無事に日本に帰国した。そしてこの腸チフス罹患騒動が、次男の性格に少し変化をもたらした。

昨年10月、そのモンターズ・ブイアン氏が、「日本に行くので、会いたい」と、連絡を入れてきた。さっそく会ってみると、ブイアン氏は、「ダッカに大学を作りたいので、協力をしてほしい」という。私はすぐに承諾したが、とにかく現地を見てみるのが大事だと思い、今年の1月にダッカに行った。ついでにダッカの縫製工場事情を探るため、わが社の幹部を同行した。そしてダッカで数社の縫製工場を見学しているうちに、ポスト中国の一番手はここではないかと思った。

さっそくブイアン氏に仲立ちになってもらって、合弁事業の相手を探した。とんとん拍子というわけには行かなかったが、7月には相手先が決定し、8月にはテストラインの開始、10月2日にオープン式典開催という運びとなった。もちろん大学の設立準備も平行して進んでいる。

③オープン式典騒動

わが社の合弁事業はほぼ順調に進み、8月末時点で、10月には操業が開始できる見通しが立った。そのとき合弁相手側が政府の役人や同業者を呼んで、盛大にオープン式典をやりたいと言ってきた。わが社はあまり派手なことは好まず、どこの国でもこっそり開業し、大げさな式典は極力避けてきた。だからバングラでもオープン式典など、毛頭やる気はなかった。ところが合弁相手側がどうしてもやりたいというので、仕方がなく、式典の一切をバングラ側がお膳立てするという条件でそれを承知した。その後、10月2日に挙行という日程のみが知らされただけで、開催日の10日前になっても具体的な式次第や、招待客などがまったくわからなかった。いらいらしながら待っていると、1週間前になってやっと通知がきた。招待状が遅れた理由を合弁側は、「バングラ人はあまり早く招待状を出すと、それを忘れてしまう。だいたい1週間ぐらい前がちょうどよい」と、弁解した。ところがこれが大きな問題を引き起こしたのである。

招待状発送から2日後、日本の本社にバングラ在住のある日本人から電話が入り、「10月2日の同時刻に、日本独資の M 社の開業式典があるのをご存知ですか。M 社は半年ほど前から、この式典を準備しており、日本から大勢のお客さんも駆けつける予定です。バングラの日本大使もそこに出席されます。昨日、貴社のオープン式典の招待状が私どもにも届きました。これを見たダッカの日本人の中には、“小島衣料は喧嘩を売る気か？”とたいへん怒っている人もいますよ」という忠告をいただいた。たしかにその電話の主の忠告のように、わが合弁会社の招待状は常識外れであり、わざわざ式典をぶつけてきたと思われても仕方がないものであった。しかし期日が間近に迫っており、どうしようもなかった。

当日、わが合弁会社のオープン式典は、バングラ工業大臣ほか250名余のバングラ人客と10名ほどの日本人客に参席していただき、盛大に開催された。ブイアン氏が日本大使館にも招待状を出したので、篠塚大使には前半を M 社、後半をわが合弁会社に出席するという心配りをしていただいた。本当にありがたかった。また、翌日 M 社にお詫びの電話を入れたところ、担当者から「わが社の社長はなんとも思っていないです。これからいろいろと情報交換しながら仲良くやりましょう」というありがたいお言葉をいただき、ほっとした。

わが社は、韓国・中国・ミャンマーなど、多くの国で縫製工場を作ってきた。その形態は合弁・独資など様々であったが、それらすべてに最初から“現地化”という方針を貫いてきた。したがってどの国でも、その国に存在している日本人組織とはほぼ無縁に近かった。今回のバングラでも、わが社は一切をブイアン氏に委ねており、バングラ既存の日本人組織にはまったく顔を出さず、仁義を切っていなかったため、今回のような問題が持ち上がってしまった次第である。

④ストライキ騒動

7月19日から22日にかけて、ダッカでは縫製工場の従業員5000人余が賃上げストを行い、激しい街頭デモを繰り広げ、アシュリア工業園區では、道路沿いの工場に投石したり、50台に及ぶ警察車両をひっくり返すなどの騒動となった。22日には警察1000人が出動し、ゴム弾や催涙弾を発射し、数名を拘束し騒動を鎮めた。少なくとも100名の労働者と40名の警察が負傷した。



《オープン式典で挨拶する私》



バングラデシュには、縫製工場が4500社以上あり、それらはダッカとチッタゴンに集中している。また縫製人口は350～400万人といわれている。今回のストやデモで、労働者は現在1768タカである最低賃金を6000タカ 《投石で窓ガラスを壊された縫製工場》

にまで引き上げることを求めた。これに対して、政府は最低賃金を3000タカに決定した。その結果、この賃金アップに耐えきれない弱小企業の倒産が相次ぐことになり、労働市場で労働者が供給過多の状態になっており、現状では企業側の口コミ求人募集にも数倍の応募があり、会社の門前に職を求めて労働者が列をなす光景は、20年前の中国を思い起こさせる。またバングラデシュの輸出の8割を繊維産業が支えており、政府は縫製工場経営者たちの声を無視することはできない状況である。

⑤工業用地なし、新規キャパに限界

バングラデシュの工業団地には、すでに空き地が全くなく、団地内で新規に工場を建設することはほぼ不可能である。また工業団地外で新規に工場を開業しようすると、数多くの許認可が必要であり、それらを全部クリアしようとするとはぼ2年かかるという。したがってバングラデシュでは既存の工場以外で、すぐに生産を拡大しようとしても限界がある。このような状況の中で、大手の縫製工場は欧米向け輸出で満杯であり、日本向け輸出ができるキャパは全くない。

⑥その他

- ・バングラデシュは緩やかなイスラム教国であり、今回のオープン式典での宴会には、テーブルの上にアルコール類がずらりと並び、それをバングラ人がぐいぐい飲んでいった。
- ・各工場の出入り口には、銃を持ったガードマンが待機している。大型工場では20名ほどいることもある。これらは政府管掌のガードマン会社からの派遣社員であるという。労働者が街頭からこれらの工場になだれ込めば、当然、銃が乱射される可能性がある。したがって労働者は投石程度で済ませており、絶対に工場内には踏み込まなかった。

4. ジャカルタ

インドネシアは GDP 年6%成長を遂げ、経済は活況を呈している。しかもそれを内需が牽引しているという。インドネシアでは1998年に暴動でスハルト政権が崩壊し、この国にいた華僑が大きな被害を受けた。それまでにインドネシアに進出していた日本のアパレル企業も、この年を境に次第にこの地から去っていった。しかし10年余を経た現在、中国から押し出された仕事が、ここでもあふれかえっている。日本のアパレル企業のジャカルタ詣だが、再び始まっている。

①インドネシア概況

- ・人口:約2億3100万人。ただし人口の約6割がジャワ島に集中しているため、人口密度は日本の約3倍。
- ・若い人が多く、これから人口ボーナスを期待できる国。
- ・石炭や天然ガスなどの資源が豊富。
- ・1998年、東南アジア通貨危機に見舞われた結果、経済が大混乱に陥り、30年間続いたスハルト政権が崩壊。
- ・インドネシア人民の怒りは、当時、インドネシア経済の7～8割を握っていたという華僑に向かった。チャイナタウンはもとより、華僑の商店や銀行などが破壊、略奪され、かなりの華僑が殺害された。
- ・1\$=8750ルピア。ルピア高の傾向。ワーカーの平均月給:約15000～20000円。

②ジャカルタと私

20年前、私が韓国のソウルで縫製工場経営に悪戦苦闘していたとき、見かねた韓国人の同業者が、「小島さん、私はジャカルタに工場を作ります。いっしょに行きませんか」と、声をかけてくれた。私はそのとき、「地獄で仏に出会った」ような気がして、その誘いに乗ってみようと思った。しかしちょうど同時に、大先輩の(株)サンテイの社長から、中国への工場進出を誘われていたので、ひとまず先に中国の工場をしてみることにした。そしてその視察旅行中に、私は中国進出を決断した。もしこのとき、ジャカルタに先に行き、そこに工場進出を決めていたら、現在の小島衣料はなかったであろう。なぜならジャカルタに進出した友人の韓国企業は、東南アジア通貨危機に翻弄され、韓国の本社もろとも倒産してしまったからである。結局、ここでも私のジャカルタとの人脈は切れてしまった。

今年の7月、取引先の商社のK氏から、「現職を一時離れて、インドネシアのジェトロにEPAアドバイザーとして出向する」とのメールが入った。K氏とわが社は長い付き合いであり、K氏のインドネシア好きはよく知っていたので、この赴任はK氏自らが望んだものであることはすぐにわかった。私は今回、このK氏を頼ってジャカルタに入った。

③ジェトロでの講演

K氏にジャカルタでの工場視察を頼んでいたら、逆に、「中国情勢と海外での企業展開」というテーマで講演をして欲しいと頼まれてしまった。これは「飛んで火にいる夏の虫」だと思ったが、引き受けることにした。当日はジャカルタ周辺の日本人企業家が30名ほど、ジェトロの会議室に集まっておられた。私は中国情勢について話し、やがて中国の労働集約型産業は競争力を失い、その仕事がジャカルタにもあふれ出ると主張しておいた。



《ジェトロで講演中の私》

④暴動後、日本企業総撤退

暴動後、経済の混乱が続く中、日本の商社やアパレル企業は稼働させていた工場を、地元企業に売り渡したりして、ほとんど撤退してしまったという。バンドンにはまだ日系企業のスラックス工場ががんばっているというので訪ねてみた。ジャカルタから3時間ほど車で走ったところに、その工場はあった。ここにも現在、欧米から仕事が殺到しており、数日前には、日本の繊維商社が久しぶりに訪ねて来たという。しかしながらこのバンドンでも、ローカル工場は内需を扱い、外資系工場は欧米向けで満杯である。欧米向けと比べて、日本向けは発注量が一桁から二桁少なく、品質の要求は10倍厳しく、しかも単価は安い。そんな仕事はどこの工場でも見向きもされないと、その日本人経営者が話してくれた。

5. コロンボ

昨年5月、内戦が終了し、経済は上向き基調。この国にも中国の影がちらついている。

①スリランカ概況

- ・人口:約2000万人。民族構成:シンハラ人74%、タミール人18%、ムーア人7%など。
言語:シンハラ語とタミール語。宗教:仏教70%、ヒンドゥー教15%、キリスト教8%、イスラム教7%など。
- ・1948年2月、イギリス連邦内の自治領として独立。
- ・1983年、シンハラ人とタミール人との大規模な民族対立が起こり、内戦状態となる。シンハラ人は中南部を拠点とし、中国からの資金、武器供与などを受けた模様。タミール人は北部ジャフナを拠点とし、インドの支援を受けた模様。
- ・2009年5月、シンハラ人の政府軍が北部のタミール人地域を全面制圧。内戦終結。
- ・100スリランカ・ルピー=78円=0.95\$ スリランカ・ルピーは安定。
- ・ワーカーの給与は15,000(12,000円)~20,000(16,000円)スリランカ・ルピー。
- ・電力、水事情問題なし、ガソリン代は日本並みで高い。
- ・主要産業は縫製業、農業。

②コロンボと私

2か月ほど前に、見知らぬ人から私のパソコンに、「スリランカのコロンボで綿織物工場を開始したいので、相談に乗って欲しい」というメールが入ってきた。私は、「今更、綿織物工場を作っても、失敗するだけなのに」と思い、お断りの返信をしようとしたが、ふと8年前にマダガスカルに工場調査に行ったとき、たまたま見学させてもらったスリランカ人経営者の縫製工場が、すばらしい管理をしていたことを思い出した。そのとき、その経営者はスリランカにはたくさんの繊維関連工場があると話してくれた。私はそれを聞いてスリランカにすぐに行ってみようと思ったが、その地が内戦状態に陥り、拡大する様相を見せていたため、それをあきらめた。私はメールの相手であるY氏に会ってみることにした。

1か月ほど前、私はY氏に名古屋で会い、詳しい計画を聞いた。すでに販売先が確定しており、工場も内戦中に停止を余儀なくされたものを安価で買収するという。そしてなによりも彼のつかんでいるスリランカ人脈がきわめてしっかりしているようだった。しかしながらY氏自身は長年、自動車関連産業の経営に携わってきており、繊維関連産業には素人なので、私に工場などの目利きをしてほしいという。私は日程を調整して、今回の東アジア駆け足調査の最後にコロンボに行ってみることにした。

③巨大な縫製工場あり、世界一 ECO な縫製工場あり。

今回のスリランカの繊維産業調査には、スリランカ通産省紡績局の局長自らが、2日間ずっと私たちに付き添ってくれた。そのおかげで、今まであまり紹介されてこなかったスリランカの繊維産業のベールをはがすことができた。もっとも局長の話によれば、スリランカには千人規模の縫製工場が100社以上あるが、紡績・紡織・染色などの繊維の川上産業はほとんどないという。スリランカはダッカと同じく縫製業が国の基幹産業となっており、輸出の大半を占めているという。

私たちはまずコロンボから南東へ車で3時間ほど走ったところにあるジーンズ工場の見学に向かった。会社の外観はそれほどでもなかったが、縫製現場に入るとびっくりした。工場内は整理整頓が行き届いており、ジーンズの品質もかなり高いものであったからである。社内が全面的に写真撮影禁止となっていたため、映像で見せられないのが残念である。なおスリランカの工場はどれも写真撮影禁止で、きわめてガードが堅かった。案内してくれた工場責任者によれば、その会社はスリランカ国内資本であり、社歴は13年で、その工場を基幹としてスリランカ国内に6工場があり、従業員総数は6700人。その工場だけでも月産80万本のジーンズを生産しており、そのほとんどがリーバイスからの受注で、欧米に輸出。生産ロットは10万本単位であり、資材はパキスタン・インド・中国・トルコなどからの輸入。最終工程では、値札付けもされていたので、見てみると40\$ 台のものがほとんどだった。現在、日本の店頭では、10\$ 以下のジーンズが主流であり、とても日本のアパレルが低価格ゾーンの製品の生産を依頼できるような工場ではなかった。現在、リーバイスなどの取引先からの発注がどんどん増えており、スリランカ国内の田舎の地方に分工場を拡大する予定だという。

次に見学した工場は、ナイキのニットシャツの専属工場であった。この工場も素晴らしかった。工場内のあちこちに、KAIZEN や6S という標語が貼られており、技術・工程管理も細かいところまでしっかり工夫されており、コンプライアンス対応も完璧だった。なおこの工場の従業員は1400人。

最後に ECO 工場として売り出し中の縫製工場を見学して、私は唖然とした。なぜなら私はこの歳になるまで、このような素晴らしい作業環境を整えた縫製工場を見たことがなかったからである。工場内は温度・湿度・CO2・ダストなどが自動管理できるようになっており、集中管理室でそれらはリアルタイムで計測されていた。工場内に走り回っている車は全部電気自動車でCO2対策を行っており、工場の屋根には明かり取りの窓がたくさん取り付けられており、節電しながら照明効果を上げ、雨水を地下タンクに溜め、それをウォッシング作業やトイレの水に使用し節水に努め、なおかつそれを浄化し広い庭の芝生に散布し、池に流し込みアヒルや魚を飼っていた。風通しがよくきれいな食堂が中庭に作っており、その側に ATM や医務室などが並んでいた。ゴミも完璧に分別回収されていた。この素晴らしい会社もスリランカ資本であり、33年の社歴を誇り、マークス&スเปนサーの《ECO 工場の看板前で記念撮影》専属工場で、全量をヨーロッパに輸出しているという。セキュリティもしっかりしており、入り口で一切の持ち物の工場内への持ち込みを禁止されたので、映像で見せられないのが本当に残念である。



靴下の製造工場にも行ってみた。ここは薄暗い工場で、あまり見るべきものはなかったが、ちょうど退勤時間にさしかかり、おもしろい光景をみることができた。この工場では出退勤管理に指紋認識式のタイムレコーダーを使用しており、終業のベルがなると同時にその前に200名ほどの従業員が列を作ったが、みんなが次々と手際よく人差し指を電話のような形をしたものに差し込んでいき、それはあっという間に終わり、全員がいなくなってしまう。この器械は300 \$ ぐらいだということで、わが社の合弁工場でも導入したいと思った。これを導入すれば、欠勤率などもリアルタイムで把握可能だからである。



《指紋認証式タイムレコーダー》

いずれにせよ、スリランカの工場はどれも巨大で活気に満ちあふれており、すべてレベルが高く、それらの工場のすべてが欧米向けの仕事で満杯であり、いずれも拡大基調であることがわかった。

④綿織物工場への挑戦

Y 氏といっしょに、綿布の紡織工場を3か所見てみた。それらは縫製工場とはまったく違い、いずれも薄汚く、整理整頓が行き届いていない工場であった。ただしそれらの工場の値段は土地を含めてもかなり安く、私は買い時だと思った。なお、中国では多くの綿紡織工場が整理淘汰され、中古の織機が安価で出回っているのので、それを買い占めてスリランカに輸入してくれば、すぐにかなり大きな紡織工場の操業が可能であると考えた。念のため、紡績局の局長に中古機械の輸入は可能かと聞いてみると、生産に使うものならば免税扱いであるという返事だった。また現在、綿糸は中国・パキスタン・インドなどから買い付けているということだったので、相談の結果、中国での綿糸買い付けについては、私が中国で調査してみるという話になった。結局、私は Y 氏のこの綿織物工場構想に一口乗ってみることにした。この手を打っておけば、スリランカの現場の生の情報が入手可能だと思ったからである。

⑤しのびよる中国の影

スリランカの南端にハンバトタという港があり、現在、そこに中国が2000億円を投下して拡大築港中である。政府はそこをハブ港として世界貿易の中心にしようとしている。さらに港周辺を経済特区に指定し、中国に見倣って、世界各国から工場誘致を行い、一大工業地帯を築く予定であり、すでに道路などのインフラは整備が終了しているという。私はこのハンバトタへ行って、現場をこの目で確かめたいと思ったが、コロンボから車で5～6時間かかるというので、今回は断念した。次回にはぜひ行ってみたいと思っている。

以上

琿春朝日村開拓団の最後の合同慰霊祭

風化させてはならない悲惨な戦争体験：「戦争は絶対にしてはいけない」

15. OCT. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

9月24日、岐阜県高山市朝日町(旧朝日村)の円城寺で、琿春朝日村開拓団の最後の合同慰霊祭が行われた。この慰霊祭は第2次大戦中に旧満州の地へ送り込まれた「満蒙開拓団」の朝日村出身の生還者たちが、現地で死亡した犠牲者を追悼するために、長年続けてきたものである。今年はその65回忌に当たるが、元団員たちの高齢化が進み、後継者もみつからないため、今後は継続困難と判断し、今回が最後の合同慰霊祭となった。今までの活動資



金の残額などを円城寺に預け、永代供養を頼み、今後は個人の参拝とすることになった。当日は約50名の参加者があり、多くの人が、「戦争はだめだと長く伝えるには、亡くなった人をしのぶことが必要なんだ」と語り合い、合同慰霊祭の終幕を惜しんでいた。

小島衣料は2005年、朝日村と琿春との因縁を深く知らずに、琿春の地に工場進出した。工場を稼働させ、しばらくたってから、私は地元の政府幹部から、岐阜県と琿春市は深いつながりがあると聞かされた。私の工場は経済開発区の中に建っており、その開発区には今ではたくさんの工場が建ちならんでいるが、そこは戦前、岐阜県の高鷲村の開拓団の居住していた場所であったという。現在、まったくその痕跡は残っていない。私はその話を聞いたとき、おそらく私の工場の土地にも、同じ岐阜県人の血がしみ込んでいるにちがいないと感じ、足下の大地に身震いしながらひざまずいた。その様子を見ていた地元政府の幹部が、私の工場から車で10分ほど走ったところに、まだ戦前に日本人開拓団の住んでいた家が残っていると教えてくれた。さっそく私はそこに行ってみた。そこが朝日村開拓団の跡地だった。たしかにそれらしき家が残っており、他にも馬の水飲み用に使ったという真ん中の窪んだ大きな石などが残されていた。また政府幹部はそこに流れている小川を指し、これは朝日村開拓団の人たちが切り開いた用水路だと教えてくれた。

私は日本に帰国して、すぐに岐阜県の「満蒙開拓団」について調べてみた。そして朝日村の開拓団の生還者のみなさんが、その体験を綴った「遠く荒野の空」(1982年刊)という本を発行されているのを知った。すでに絶版になっており、なかなか入手できなかったが、知人から借りてやっとのことでそれを読むことができた。私はそれを、ぼろぼろ涙を流しながら読んだ。そしてこのようなことを二度と繰り返してはならないと思った。また「絶対に戦争はしてはならない」と決意し、それが戦後生まれの私たちが、先輩の日本人から受け継ぎ、さらに私たちの子孫にしっかり伝えていかなければならないことだと思った。なお今では、この本は歴史的な資料としてその価値を認められるようになっており、米国の国会図書館からも引き合いがあり、編者の棚倉氏が残り少ない手持ちの中から5冊を寄贈したという。

この本の中には、手書きではあるが当時の様子が手に取るようにわかる地図まで添えてあった。それによればたしかに私の工場のある場所は、高鷲村の開拓団の居住地であった。私はこの奇縁を無駄に捨て去りたくはないと思った。そこでこの琿春の地に、なにかの形で「岐阜県満蒙開拓団」の痕跡を残し、「戦争は絶対にしてはならない」ということを子孫に伝えたいと思った。しかしながらその後、なにも行動できないまま数年が過ぎ去っていった。

9月初旬、朝日新聞に、「戦後65年 最後の慰霊祭」という記事が載った。読んでみると、高山市で上述の慰霊祭が行われるという内容だった。私はすぐに本の編者であり、主催者の一人であった棚倉彦一さんに手紙を書き、この慰霊祭への参列させていただきたいという旨を申し出た。そしてその末尾に、「できうれば琿春に朝日村の痕跡を偲べるものを遺したいと考えている」と書き添えておいた。

残念ながら慰霊祭当日は、私は東アジアに出かけることになり(ダッカの合弁工場のオープン式典の予定が二転三転したため)参列できなかったのも、わが社のスタッフに代理で行ってもらった。そのとき棚倉氏はそのスタッフに、諄々と次のような話をしてくださったという。

棚倉彦一氏の話 (上述の本や棚倉氏の「満州移民開拓体験記」に詳述されている)

(終戦後の状況)

- ・延吉(旧間島)まで12日間かけて避難した。日本人の兵隊クズレの共産党員が牛耳っていて、いまでも「共産党」と聞くと蕁麻疹が出ます。
- ・その後(晩秋)、ソ連軍の指示ということで開拓地に戻るように指示が出て琿春に戻ったが、開拓地には入れず、現地の警察公舎(日本の警察署ではない)に収容された。布団もオンドルもなく、「ワラス(藁?)」を巻いて寒さをしのいだ。原高粱がわずかに配給され、炊いてみんなでわけて食べた。英安炭鉱に連れて行かれた。
- ・伝染病が蔓延して死体を処理する穴を掘るにも凍っていて掘れず、河原に積んだ。毎日何十人と死んでいった。延吉から早く戻っていたらこんなに死者は出なかったと思う。その後、滋賀県の青年団の若い人たちが「三家子」(地名)に埋めた。当時の話では遺体の数は760人とも780人とも聞いた。墓標はないが、今でもこんもりとよりあがっているだろう。残された人たちの遺骨はいまも雨風にさらされている。
- ・琿春河上流の「八達門」(地名)の朝鮮族の家にお世話になり石炭売りとして働いた。日本人女性の子供を連れてたくさん「乞食」になっていた。はじめは中国人の家とかを回っていたが、「乞食」の数が多くて相手にされず、日本人がいる家を頼りに物乞いするようになっていた。大人の女性だけなら断れるかもしれないが、小さな子供を連れていて断れなかった。家の食事を少しずつ与えていたことが主人に見つかりクビになった。
- ・1946年8月30日に移送命令が出て、琿春から図們まで37kmを3日3晩寝ずに急いで歩いた。少し体力があったので急きょ組織された救護班に入り、担架を担いだり、「歩け!歩け!」と寝ないように声をかけて回った。図們に入る峠(図們峠)の坂の前で大雨の中をいびきをかいて寝ながら歩いている人もいた。途中の琿春河では以前、日本兵士が何十万人も死んだと聞いている。9月1日に(コロ島)を出発して日本へ帰国した(他の人の話では皆が一緒に帰ってきたのではなく、バラバラに帰国した)。

- ・父と妹が満州から帰らなかった。父は徴兵されソ連兵に銃床で叩かれ頭蓋骨が陥没し、その後伝染病で死んだ。妹は栄養失調と伝染病で亡くなった。
(帰国後)
- ・国のため、村のために満州へ行き、生き地獄の満州から戻ったが、帰国すると「一攫千金を夢見て失敗したやつら」と言われ、誰も迎えに来てくれなかった。身を寄せる親せきもないため1km手前で村に入れず愛知県へ戻った。朝日村には随分長く行かなかった。後に「一攫千金を夢見て…」とは、村に残った人たちに役場がそう宣伝していたと知った。本を出してから陰口を叩いていた人から「満州での苦労を知らずに申し訳なかった」とお詫びをいただいた。
- ・いま、小島衣料が工場を建てている場所は（高鷲村開拓団の）太陽屯と呼ばれていた場所だと思う。小島前社長は小論で、琿春に歴史をとどめる何かを残されようとされていると聞いているが、何も残さないでほしい。私たち開拓団は「侵略のシンボル」だった。

私はわが社のスタッフからこの報告を受け、棚倉氏の最後の部分の真意を聞くために、先日、直接お会いしてみた。棚倉氏は80歳という高齢にもかかわらず、実に壮健で頭脳明晰であり、私の意向をはっきりと拒絶され、その上にもっと適切で理想的な提案をしてくださった。私はその場でこの棚倉氏の提言に全面的に賛同し、「いつの日にか、これを実現したい」と申し出た。すると棚倉氏は私の心を見透かしたように、「全国的な運動として展開するようにして、スタンドプレーは慎んでください」と、釘を刺された。私は本当に恥ずかしかった。

棚倉彦一氏の意見と提案

- ・琿春で開拓団を慰霊するような記念碑などはぜひとも設立しないでいただきたい。開拓団は侵略の象徴であることは拭いきれないし、慰霊碑などの記念物を将来にわたって維持する費用は町にも私たちにもないし、将来の反日運動の中で破壊されたりすることも忍び難い。以前にも旧高鷲、旧和良村の役場がいつしよになって琿春に慰霊碑を作ろうという話があったが、私たちが各方面に意見書を出して中止をさせた経緯もあるので。
- ・そのかわりに、前に話した「三家子」という場所に、760体以上の日本人の遺体が埋まっているので、それを掘り起こして現地で荼毘に付して、遺骨だけを日本に持ち帰り、高山の円城寺に合葬してほしい。また「三家子」の土地は、祓い清めて元の更地にし、現地の中国人農民に返してほしい。現地の農民は、この地を耕すと人骨がたくさん出てくるので、気味悪がって「三家子」の土地には手を触れないでいる。

なお数回前の小論でも取り上げておいたが、黒竜江省ハルビン市郊外の方正県に、その地で亡くなった開拓団の日本人の慰霊碑が建立されている。これは中国に残った日本人や中国人が建て、それを日中共同で守っているもので、その存在意義はまことに大きい。棚倉氏の意見と提言は、このことと相矛盾するものではないと考える。

以上

【中国経済最新統計】（試行版）

東アジアセンターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることにしましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008 年												
8 月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9 月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10 月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11 月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9

2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5 月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6 月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7 月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8 月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9 月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10 月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11 月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年												
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2 月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3 月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4 月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5 月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5
6 月	10.3	13.7	18.3	2.9	24.9	200	43.9	34.6	8.3	39.6	18.5	18.2
7 月		13.4	17.9	3.3	22.3	287	38.0	23.2	12.8	29.2	17.6	18.4
8 月		13.9	18.4	3.5	23.9	200	34.3	35.5	21.2	1.4	19.2	18.6
9 月						169	25.1	24.4	12.2	6.1	19.0	18.5

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、() 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。